

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月17日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520822

研究課題名（和文）先史土器復興を中心とするブラジル・アマゾン先史文化の現代的利用の人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study of the Modern Use of Prehistoric Cultures in Brazilian Amazon, Focusing on the Revival of Prehistoric Pottery

研究代表者

古谷 嘉章（FURUYA YOSHIAKI）

九州大学・比較社会文化研究院・教授

研究者番号：50183934

研究成果の概要（和文）：ブラジル・アマゾンにおいて先史文化が、近年、さまざまなかたちで利用され始めている。この現象を「先史文化の現代的利用」ととらえ、1960年代に始まる「先史土器復興」（先史土器をモデルとする複製や民芸品などの制作）を焦点として、文化人類学的実態調査によって、その実態を明らかにした。陶器生産による経済振興や、先史文化を援用しての行政による地域アイデンティティ強化の試みなどの結果、先史土器の意匠が町中に氾濫するなかで、現在の住民と先史文化のあいだに、「断続」とでも呼びうる興味深い結びつきが生まれつつある。

研究成果の概要（英文）：In Brazilian Amazon regional prehistoric cultures are increasingly “made use of” in various manners. The present anthropological research investigates that phenomenon, considered as a case of “modern use of prehistoric cultures,” by focusing the revival of prehistoric pottery (the production of various types of pottery replicating or imitating the styles of local prehistoric earthenware). As a result of the policies to invigorate local economy through pottery production and the administrative efforts to strengthen local identity resorting to prehistoric cultures, the designs copied from prehistoric pottery are visible everywhere, which testifies the birth of some interesting relationship, which could be called “continuation through breaks,” between regional prehistoric cultures and local people.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：ブラジル、アマゾン、先史文化、土器、陶器生産、地域的アイデンティティ、物質性、遺跡

1. 研究開始当初の背景

グローバル化下でのブラジル・アマゾンの民衆文化の再編過程について調査

研究を積み重ねてきたなかで、先史文化が、予想外のさまざまな文脈で文化的・経済的・政治的な意義をもち始めていることに気

づかされ、ブラジル・アマゾン舞台に、「先史文化の遺したモノ」が現代社会においてどのような意味・価値を与えられて利用されているのか、すなわち「先史文化の現代的利用」の実態を詳細かつ具体的に調査して明らかにすると同時に、その具体事例を「遺されたモノを通しての過去との関わり」という一般的な問題のなかに位置づけて理論的に考察するという課題を設定するに至った。

2. 研究の目的

ブラジル・アマゾン地方において現在急速に進行中の「先史文化の現代的利用」のプロセスを、先史土器という遺されたモノを現代に活かす試みとしての先史土器復興を焦点とするフィールドワークおよび文献研究を通じて、詳細かつ具体的に明らかにすることを目的とする。対象とする先史文化は、アマゾン河口のマラジョー島を舞台とした「マラジョーア文化」(4~17世紀)とアマゾン中流のタパジós川流域の「サンタレン文化」(10~16世紀)であり、「マラジョーア土器」と「タパジós土器」の複製およびそれを模倣した陶器生産、ならびにその多様な利用・転用の実態を、地域経済、地域的アイデンティティ、学術的研究との関連のなかに位置づけて明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 【2種類の調査】

(A)「先史土器復興を中心とする先史文化の現代的利用についての文化人類学的実態調査(ブラジル連邦共和国パラ州、カショエイラ・ド・アラリ郡、サンタレン市、ベレン市)」と(B)「ブラジル・アマゾンの先史文化を対象とする考古学の歴史・現状についての文献研究および研究機関における調査(ベレン市、サンパウロ市、リオデジャネイロ市)を並行的かつ関連させつつ実施する。(A)の実態調査の対象とする地域は、いずれも先史土器復興の試みが存在し、かつ比較に値する相違を示しており、ブラジル・アマゾンにおける「先史文化の現代的利用」の全体状況の把握のために調査が不可欠である。

(2) 【文化人類学的実態調査】

実態調査に当たっては、つぎの項目について具体的に明らかにすることを主眼とした。①住民の遺跡・遺物との日常的な関わりおよび先史文化観、②現地における資料館など先史文化を含む地域文化の収集展示の実態、③先史土器の復興および先史土器に由来する意匠を転用する試み、④地域振興・雇用促進などを目的とする社会プロジェクトにおける「先史文化利用」の実態、⑤大学・博物館など学術機関および援助機関など外部団体の関与、⑥行政当局の文化政策・経済政策における「先史文化」の位置づけ、⑦初等教育に

おける地域先史文化についての教育の実態、⑧観光産業における「先史文化の利用」の実態と、それへの現地住民の関与の実態。

4. 研究成果

(1) 【文化人類学的実態調査の成果】

①2009.8.28-9.5:マラジョー島カショエイラ・ド・アラリおよびサンタ・クルス・ド・アラリ郡において、聞き取り調査および遺跡の現地検分を中心に調査した結果、行政や観光振興の言説においてマラジョーア文化が地域的アイデンティティの核として喧伝されている一方で、現地住民にとっては、遺跡や遺物は「価値あるものらしい」「絶滅したインディオが遺したモノ」という非常に曖昧かつ漠然としたかたちでイメージされているにすぎないが、それでも「地元モノ」という意識はあり、外部者がそれを地域外に持ち出すなどすることに対しては抵抗感が強いことが明らかになった。

②2010.9.2-9.12:アマゾン中流域のサンタレンおよびアルテール・ド・シオンにおいて同地域の先史文化であるサンタレン文化(殊に土器)が住民にとってもつ意味について実態調査を行った。サンタレンでは、ジョアン・フォーナ資料館において、造形作家兼郷土史家レオン氏への聞き取りを中心に調査し、地域文化および地域アイデンティティのなかで、先史土器がいわばロゴとして遍在している一方で、その内実は空虚であることが判明した。アルテール・ド・シオンでは、陶器生産および「フェスティヴァル・ド・サイレ」の調査を実施した。陶器生産に関しては、実用土器の生産はほぼ終焉を迎えている一方で、先史土器をモデルとする観光客向けの陶器生産は、ブラジル零細小企業支援協会が意図したほどの規模には至っておらず、依然として観光土産の民芸品(陶器)は、ベレンなど他の陶器生産地から供給されている状況が明らかになった。他方、アマゾンを代表する民俗文化フェスティヴァルとなっている「サイレ」の調査を通して、地域アイデンティティの核としては、先史文化とのつながりより植民地化以降の民衆文化との連続性のほうが重視されていることが判明した。

③2012.3.9-3.18:イコアラシ(ベレン市)において複製先史土器の生産および流通の現況について実態調査を行い、従来からの構造的な問題(生産流通の経営およびインフラの不備)が継続している一方で、新しい商品開発や販路開拓も進行中であることが判明した。マラジョー博物館(カショエイラ・ド・アラリ)の歴史をテーマとしたドキュメンタリー製作者にインタビューし、マラジョー島社会における住民と先史文化との関係の実態について多面的な理解を得ることができた。

④2013. 3. 2-3. 17: イコアラシ (ベレン市) において、昨年にひきつづき複製先史土器の生産および流通の現状について、生産者、販売者を中心に実態調査を行い、全般的停滞状態にあるなかで、近い将来に予定されているワールドカップとオリンピックによる観光客の増加によって見込まれる需要増に向けて、ブラジル零細小企業支援協会の主導のもと戦略が準備されている一方で、香水瓶への転用など観光客とは別の市場(付加価値をつけた先史土器風実用陶器)の開拓も模索されており、販路の多様化が進行中であることが判明した。

(2) 【考古学研究機関における調査の成果】

①2009. 8. 19-8. 27: パラ連邦大学の考古学者を中心に発掘調査の現状および問題(資金ならびに住民の利害対立等)、遺物の違法な売買など、マラジョアラ文化の非学術的利用が盛んになる一方で、学術調査は深刻な問題に直面している現状が明らかになった。

②2010. 8. 26-9. 1: エミリオゲルズ博物館の考古学者を中心に、アマゾン中流域における陶器生産およびそれと関連した自然教育プロジェクトの現状について調査を行った。

③2012. 3. 20-3. 22: 連邦マラニオン大学(サンルイス)人類学部で「アマゾンにおける陶器: 考古学とグローバリゼーションの間で」と題する研究講演を行い、出席の研究者らとの討議を通じて、ブラジルの共通状況とアマゾン地方の特殊性について理解を深め、州立パウリスタ大学(サンパウロ市)において民俗学研究者と民衆文化と民芸品生産について、ブラジルの文化政策との関連で包括的な議論を行った。

④2013. 3. 10-12: リオデジャネイロ州立大学において、アマゾン先史土器復興について調査体験をもつ複数の研究者と意見交換を行う一方、国立博物館における展示について調査を行い、ブラジルの歴史のなかでのアマゾン先史文化の位置付けの特徴について明らかにすることができた。/2013. 3. 14: 州立パウリスタ大学において民俗学の大学院セミナーにおいて「ブラジル・アマゾンの陶器生産と民衆文化」について報告し、ブラジルにおける民俗文化の現代的利用について討議した。

(3) 【主たる研究成果】

上記の実態調査等ならびに4年間を通じて実施した文献研究をつうじて得られた研究成果は多岐にわたるが、そのうちに主たるものについて以下に略述する。

① 【先史土器復興の経済的利用】

アマゾンの先史土器をモデルとする陶器生産を各地に根付かせて地域経済振興につなげようとする試みは全般的には、短期的には効果をあげても、地域経済のなかに安定的に定着する例は多くはないが、いくつかの地域

においては、販路はいまだ不安定であるとは言え、地域の文化に根差した新たな収入源となりつつある。他方、陶器生産に近代的経営を導入して経済活動として安定させようとするブラジル零細小企業支援協会のプロジェクトによる試みは、総体としては成功しているとは言いがたく、需要が観光客など変動する不安定な市場に依存し続けており、生産者は、インフラ整備など行政による支援の不足を訴えている。

② 【先史土器と地域アイデンティティ】

マラジョアラ土器やタパジョニカ土器など先史土器に代表されるアマゾン先史文化のイメージは、その内実は非常に漠然としたままで、観光振興政策をはじめとする様々な領域で地域アイデンティティ(アマゾン全域もしくは市町村や郡レベル)の表象として濫用とも言えるほど多用されており、言わば著作権者のいない先史土器の幾何学文様だけが、無制限に複製されて増殖し、多種多様な媒体へと転移している現状がある。

③ 【先史文化の考古学と現地社会】

アマゾン先史文化を対象とする考古学的調査研究は、ひきつづき様々な困難に直面している。広大な熱帯雨林というアマゾンの自然環境が調査を困難にしており、それに加えて資金の不足も障害となっているが、そうした外在的問題と並んで、考古学的調査研究とくに発掘調査の意義に対する地域社会の無理解、遺跡の破壊や遺物の違法な売買など、現住民の生活と遺跡・遺物の尊重との間の(しばしば対立する)関係をどのように調停するのかという、現代社会における先史文化の位置付けという考古学研究にとっての内在的問題が難問でありつづけている。つまり、「先史文化の適切な現代的利用」とはどのようなものであるべきなのかについて、きわめて多岐にわたる社会的アクターの間には、深刻な意見の相違があり、そもそもこの点に関して「誰が当事者なのか」という出発点自体が、争われる論点なのである。

④ 【先史文化の多様な利用形態】

「アマゾン先史文化の現代的利用」をめぐる以上のような錯綜した状況のなかであって、人類学的に興味深いだけでなく、地域の将来を考えるとときに希望のもてる動向がないわけではない。それは、サンパウロやリオや外国の博物館(あるいは私的コレクション)へと「優品」と言われるような先史土器が流出しつづき、アマゾンの住民が、地域の先史文化と切り離され続けてきた長い歴史に転換点が訪れつつあることである。その変化の担い手が、(完形品ではない)土器片や、別の媒体へと転写された文様や、新たに制作されたレプリカであることは、「先史文化との(連続でも断絶でもない)断続のかたち」として非常に意味深い。おそらく考古学は、「先史

文化の現代的利用」の形態の特殊な形態のひとつであるにすぎず、それ以外に多種多様な形態があるというのが、本研究の最も注目すべき成果とすることができるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

古谷嘉章「物質性的人类学に向けて」『社会人类学年報』、査読有、36 巻、pp.1-23、2010

古谷嘉章「人類学がとりくむべき物質性とは何か」『民博通信』、査読無、136 号、pp.20-21、2012

古谷嘉章「物質性を文化人類学する」『月刊みんぱく』、査読無、10 月号、pp.10-11、2012

古谷嘉章「ゴミと物質性」『民博通信』、査読無、139 号、pp.24-25、2012

[学会発表] (計 1 件)

古谷嘉章「Neo-Marajoara:アマゾン先史土器のモダニズム」第 33 回日本ラテンアメリカ学会定期大会、中部大学、2012

[その他]

研究講演「A Cerâmica na Amazônia」(アマゾンにおける陶器)(連邦マラニョン大学、ブラジル連邦共和国サンルイス市) 2012 年 3 月 21 日。

研究報告「A Cerâmica e Cultura Popular na Amazônia Brasileira」(ブラジル・アマゾンの陶器生産と民衆文化)(州立パウリスタ大学、ブラジル連邦共和国サンパウロ市) 2013 年 3 月 14 日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古谷 嘉章 (FURUYA YOSHIAKI)

九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授

研究者番号：50183934